

歴史文化クラブ研修会レポート

興福寺・大安寺の歩みと今

— 廃仏毀釈を経て —

羽尻 嵩

本年度はじめての歴史文化クラブの行事となった12月15日、この冬初めての寒波がやってきた。そんな中、熱意ある22名が集まった。



今回の研修は、奈良の興福寺と大安寺を訪ねて、住職さんに寺の歴史と明治の「廃仏毀釈」

について話を聴かせていただき、仏教についての理解を深めるのがテーマです。

1868(慶応四)年、江戸幕府に替わって、新政府がすぐに出したのが神仏分離令ですが、これは新政府が、江戸幕府に代って日本全国の寺院の勢力をなくし、神社の権限を強めるために出した命令です。ところが、その**神仏分離令**が出されると、虐げられてきた神官や村人達が寺に押しかけて、仏像・経典を壊し、寺や神社から僧侶を追い出す暴動が全国に広がっていった。この暴動事件を「廃仏毀釈」という。

興福寺・・・参加メンバーはまず、東金堂、国宝館の仏像を拝観し、その後、寺の講堂で大森俊貫氏(副主任)のお話を聴く。100人は優に入れる講堂に入ると、離れて椅子が並べられ、扉が開けられていて、寒い外気が入り込んでいた。

パワーポイントでの説明。興福寺は他の地域と違って、僧侶自ら僧侶の身分を返上したので神官や地元住民との大きなイザコザは少なかったが、政府に広い領地を取り上げられ、無人となった建物の中で、多くの仏像が何年も放置されて被害を受けた。廃仏毀釈直後に撮られた数枚の写真が映された。中金堂の片隅に雑然と放置された数体の仏像は、死体のようにみえた。

中でも、手の一部がもがれた阿修羅像の写真は、人間どもの仕事を深い悲しみの目で見つめているようだった。



登大路の前の興福寺の境内を取囲むガッシリとした屋根付の土塀を撮影した写真。(敵兵の攻撃を防御するために造られたと思われる)。その土塀は、廃仏毀釈後にすべて取り払われていてそこに土塀があったことを知る人は少ない。

今はここにおられる僧侶は7名とのこと。寺の研究部門の唯識論についての質問には、大森さんから明快な答えが返ってきて、参加メンバーも目から鱗の感をもたれたようです。

大安寺・・・バスで大安寺に移動し、大安寺の講堂で昼食をとり、河野良文貫首のお話を聴く。



大安寺は飛鳥時代の氏寺から奈良時代には仏教を学

ぶ国営のお寺として、インド、ベトナム、中国の僧侶がすべてここで教学し、またこの寺を完成させた道慈や、平安時代以降の仏教を広めた最澄や空海も学んだ大寺だった。その後何度かの火災で伽藍が消失し、江戸時代の終わりには廃寺のようになっていたとのこと、明治以降は寺院の復興には苦勞されたとの話であった。

感想・・・今回、このテーマを選び、なぜ廃仏毀釈の暴動が起きたかその要因を探れたこと、また、奈良のお寺について多くのことを知り得たことに感謝します。